

橋姫

蜜瀬かえで 著

頭が見えた。

後頭部だった。

大きく開け広げられた窓の枠を挟んで向こう側。僕の席に座って真っ青な空から目を逸らして見下ろしたその場所。具体的には教室に付属のベランダ壁際。

授業中、ふとした弾みでそこを覗いて、見えてしまったつむじが一つ。

一瞬、肺の底が捻れる感じがした。

そこにそんなものがあるだなんて予想もしてなかったから驚いたというのもあるけど。もっと素直に。「それ」を見た瞬間、ただ何とも言えない無性な嫌悪感を抱いた、という方があっている。理由は分からない。

理由は分からなかったけれど。

——酷く、吐き気がした。

数学の授業中だった。前に出た生徒がだらだらと問題を解かされている間だった。暇を持て余していて、それでも眠気が浮かぶほどでもなかった僕は、自然と視線を窓の向こう側へと向けていた。僕の席は教室窓側の一番後ろにあった。

夏の象徴ともいえる青々と明るく澄んだ空がクリアで、三階の教室から見える景色は遠くの方までくつきりと映えていた。

そしてそれが僕にはどうしようもなく居心地悪く感じられてしまったものだから。思わず目を伏せて。

「それ」が視界に入った。

始めは何だか分からなくて。誰かが置いたゴミかなにかだろうという思いで見続けて。その次の一瞬あたりでふいに気が付いた。

人が蹲っているのであった。

僕は思わず、自身の顔が引き攣るのを実感した。

いったい何時からそこにいたのであろう。なぜ、僕は今まで気が付かなかったのだろう。なぜ、それは今こんなところにいるのであろう。

そういう驚きや困惑に通じるような要素も、なかったわけじゃない。

でも、そうではなくて。

僕が一番感じたのは——。

「それ」が唯只管に厭らわしい、というそれだけであったのだ。

それなのに。どうしてか、目が離せなくなった僕は、そ

のまま「それ」を凡庸に見つめ続けるだけだった。

声をかけるでもなく、誰かに知らせるでもなく、只唯、呆と。

胸焼けのような妙に粘着質な空気が気管支のあたりにわだかまるのを自覚しつつ、その後頭部を眺め続けたのだった。

すでに教室の授業は遠くなっている。問題を解き終わっても未だ黒板の前から帰してもらえないクラスメイトがようやく席に戻り、停滞していた授業がのろろと動き出してからも、その状態は続いていた。

僕はその頭が、時折風に吹かれたように左右に揺れるのを見た。その度にその長い黒い髪が制服の肩口に擦れるさらさらとした音を聞いた。

まるで何かしらの音楽を聴いているように見えた。イヤホンでもしているのかもしれないと思った。

そんな風に頭は揺れていたけれど、首から下は全く微動だにしていなかった。肉の薄い背中を突き出すように丸めて、しゃがみ込んでいる。

窓の下、ちようど室内から見て死角になった壁際に寄っているから、本当に頭と肩口と背中しか見えない。顔はずっと伏せたままだ。

誰だかは全く分からない。でも、うちの制服を着ているからクラスメイトでないことだけは確かだ。この教室の席は全部埋まっているのだから、他のクラスの生徒に違いない。

そんな動作につながらない空虚な思考だけが、だらだらと通り過ぎていく。考えている事柄は意味があるようで、その実、僕自身には何とも無感動な確認の羅列が続く。

体格は多分僕より頭一つ小さい程度だろう。髪は制服のセーラーカラーを隠すところまで伸びて、妙に水気を感じさせるような黒々としたつやが覆っている。

ふと、その髪を思いつきり引つ張つてやりたい気分になった。

理由はない。

驚かされたからだとか、勝手にそこに居座られたことに腹が立ったからだとか、そういったことも関係なく。

「それ」の髪をおもいつきり、ちぎれるほどに引つ張つてやりたくなったのだ。

その時の気分を敢えて言葉にするなら、「それ」があまりにも汚らわしく思えて仕方なかったから、である。

厭らわしく思えたからこそ、「それ」に対して何か酷いことをしてやりたくなったのだ。

そして、それに対してそういった衝動の湧き上がったことが、僕にはなぜか非常に当たり前のことのようにすんなりと納得できてしまっていた。

別に、元々僕に加虐的な趣向があったとか、そういった類のものではなくて。もっと自然で素直な感情の発露だった。普段から「当たり前」として見られているような、理屈が薄ぼんやりとしたところで「そうである」とだけ抱かされるような想い。今目の前にある「それ」は、そういうものでしかなく、そういうものなのだ、と。

だけど、いくら自然であったとしても、その衝動の湧き上がることが堪らなく居心地の悪いのも確かだった。僕にとってのより自然な良心の呵責というものが、普段感じるよりもずっと鮮明に湧き上がってきていた。

だけでも、だ。

その良心とはそもそも何に対して感じた良心であろうか。僕は——今本当にそういった感情を覚える必要があるのだろうか。

そんな普段なら気にも留めないような、普段なら答えが当たり前すぎる事柄が、分からなくなつて、分からなかった。曖昧だった。不明瞭だった。不透明だった。

いや、そもそも規定されていなかったのだろう。決めら

れていなかったのだろう。当てはまらなかったのだろう。なぜなら今僕が見下ろしているそれは、ただ厭うしいだけの規格外だったから。

だから、今もこうして溢れ出してくる湧いてくるこの醜い衝動も十分に容認されるはずなのだ。許されるはずなのだ。それ以前に、何をしたとしても、何もなかったのと同値なのだ。例え、路傍の小石を蹴ったとしても誰にも攻められないのと同じである。

そのことにやつと気がつけて、ようやくに僕は、胸のこの厭うしさがどうしようもなく愛おしく感じられたのだった。

髪を引っ張ってやりたいのも、口汚く罵って、したたかに打ち据えてやりたいのも、汚れた教室の床に無様に這い蹲らせて華奢な体を蹴りつけてやりたいのも、その細い今にも折れそうな白い首を力一杯に締め付けてやりたいのも、今この校舎の三階から突き落としてやりたいのも、刃物で刺し通してやりたいのも、その頭に上から劇薬をぶちまけてやりたいなんていう感情ですら。

全てが異常ではなかった。反してはいなかったのだから、間違いとはされないことだった。誰も何とも思わないことだった。気にもされないことだった。

それは全部今日の前にある「それ」が愛おしいほど厭う
しい存在だからこそだった。

目は完全にそれから離れなくなっていた。授業の音も掻き消えていて、それと僕の間に邪魔なものは何もなかった。いつの間にか、そろそろ手を伸ばしていた。大胆に窓から身を乗り出していた。その黒々と濡れたような髪のある頭は通り過ぎていた。手のひらは不自然に冷たく乾いていた。そのくせ、妙に脈動していた。目的地は真つ白なうなじだった。指に力が入っていた。もう少し加えれば、それのか細い首はタンポポの茎を折るのと同じくらいに容易く片手で手折れそうであった。白い肌から真水のように冷たい気が立ちこめていたのに触れていた。僕の手の皮膚がその皮膚にもう少しで触れそうなのが厭うしくて、でもそう想えるのが愛おしくて、その首に僕の指が食い込む感触が鮮烈にイメージされて、あまりに甘美に感じられたから。だから——そうした。否、そうしようとした、瞬間。

突然。

この耳によく染み付いた、くぐもって滲んだような、どこまでも電子的な鐘の音が全身に降りかかってきたのだ。
——授業の終了を告げるチャイムであった。三限が終わ

る合図であった。生徒にキリツを促すようずっと昔から刷り込まれ続けた音だった。

反射的に振り返ると、数学の教師はいそいそと立ち去るところで、四限が始まるまでの一時の開放感がいつの間にか教室中に蔓延しだしているところだった。

隣の席では如何にも勉強に精を出していた感で背を伸ばす生徒がいた。前の席では早速輪になって談笑する生徒がいた。少し離れた方では連れ立って教室を出て行く一団があった。授業が終わったことにも気付かず机に突っ伏す生徒もいた。

平常な空間だった。いつもの、普通の状態であった。

そう感じられたことにより、さっきまでの僕が異常であったことになってしまった。誰にそう言われたのではなく、僕自身がそう感じたのだからそうなった。そうにしてしまっていた。

気付かないうちに高ぶっていた「何か」が急速に覚めて、醒めて、冷めて、褪めていく感じがして……ほっと、ばかりした。

気配がして、釣られるようにしてもう一度ベランダの床に目を落とした。

緩慢に、「それ」が立ち上がっていた。

蹲っていた状態から姿勢が伸びていて、そのシルエットを高くして、その背を僕に向けて立っていた。

「……あ、」

思わず息と一緒に妙な声を出していた。その声に反応するかのようにして、それが初めて振り返る。

ゆつくりと。でも、しなやかな動きであった。

横顔が髪に隠れていたのが、靡いて、ひた隠されていたその面が露になった。

そして、その顔を見て、僕は、驚愕と同時にストンと何か腑に落ちた気がした。

「それ」——その彼女は——あまりにも美しすぎた顔立ちをしていた。

言葉は出せなかった。やはり、ただただ呆と見るだけであつた。

そんな僕に、振り返った彼女は、表情の一切感じられない顔で。それでも蔑みの十分に込められたその目でこちらを一瞥すると、何も言わずに、踵を返した。そしてそのままベランダを歩き去っていった。

僕は、彼女が隣の教室を通り過ぎて、その隣の教室をすぎ、そして引き戸を開け、その隣の教室へと入っていくのを見た。

そのとき、その教室からは明るい歓声が聞こえた気がした。

空は相変わらず馬鹿みたいに青くて。ひどく居たたまれない気持ちでした。